

象徴としての“鬼”と“トッケビ”

—子どもに語る昔話から—

“Oni” and “Tokkebi” as Symbols

—From Folktales for Children—

林 鎮 代*

Shizuyo HAYASHI

【抄録】

昔話は、子どもが好む児童文化の一つとして、長い間子どもに語り継がれ親しまれてきたものである。しかし、昔話には子どもが楽しむというだけでなく、大人が子どもに重要な様々な情報を知らせる方法の一つとしても活用されてきたのである。そうした意味からも、昔話に登場するものは、子どもに示すべき何かを象徴するという役割をもっているのである。

日本の昔話には、恐ろしい存在としての“鬼”が度々登場してくる。そして、韓国の昔話にも、日本の“鬼”と同じ姿を持つ“トッケビ”が登場している。しかし、“鬼”と“トッケビ”は、その性質が同じようには表現されていない。日本の“鬼”と韓国の“トッケビ”は、どのような象徴とされ、どのような意図を持って子どもに語られてきたかを考察した。

Abstract

Folk tales have been handed down to children, and attracted widespread popularity as a child culture children favor. However, folktales have been utilized not only as children's amusement, but also as one of the ways that adults make a variety of important information known to the children. From this meaning, what appears in folk tales has a role to symbolize something that should be shown to children.

In Japanese folktales, “Oni” appears frequently as a terror. And also in Korean folk tales, “Tokkebi” has the same form with Japanese “Oni”. However, the characteristics of “Oni” and “Tokkebi” are not described in the same way. What Japanese “Oni” and Korean “Tokkebi” have symbolized and what adults have intended when they talk to children were considered.

* 関西国際大学教育学部

1. はじめに

子育ての中で、子どもにお話を語って聞かせることは、昔から行われてきている。その昔のお話には“鬼”¹⁾が登場するものが多くある。子どもは、大人の語るお話から“鬼”が恐ろしい存在であることを知らされる。お話を通して子供に伝えられるのは『親の言うことをきかない子どもは、“鬼”に食べられてしまう』『悪いことをする子どもの元には、“鬼”が来る』『一人で遠くに行くと、“鬼”にさらわれてしまう』という教訓である。昔から“鬼”の登場する話として子ども達に多く話された物語には「桃太郎」「一寸法師」「こぶとりじいさん」「おむすびころりん」などが一般的である。どの話も“鬼”は強い力を持っていて、人間に危害を与える存在として登場している。

当然、こうしたお話の中での“鬼”は、「恐ろしい力をもったもの」「悪さをするもの」「近づいた者はひどい目に合わされる」「退治すべきもの」として子どもに認識されてきた。“鬼”は、子どもの世界にはもちろん、人間社会にとって決して相容れない存在として、幼い頃より繰り返し教えられてきたのであった。その結果、“鬼”は人間社会から排除すべき対象であり、抹殺しなければならない存在として人々に共通理解されてきた。それゆえに、昔話の中で“鬼”を退治した桃太郎や一寸法師は、人々にとって若々しく、勇気に満ちており、正義の力を存分にふるう英雄であった。その一方で、年老いて力強さを失った老人（「こぶとりじいさん」、「おむすびころりん」の話の中のおじいさんなど）は、とっさの機転で踊りを踊ったり鶏の鳴き真似をしたりすることで、“鬼”から逃れたり宝を奪ったりした「利口者」「知恵者」とされ、同じく力の弱い女性や子ども達に「どのように“鬼”と戦い、あるいは逃れるべきか」という手本として伝えられた。そして、子どもには、長じては人々のために“鬼”に立ち向かうような力と勇気を持った桃太郎や一寸法師のような大人となることが期待され、力のない幼少期には老人のように知恵をもって“鬼”から逃れるようにと、事例としての昔話が語り継がれてきたと考えられる。

いずれにしても、そこには“鬼”を自分たちの人間社会に受け入れようとか、互いに折り合せて共存しようといった発想は、全く見られない。“鬼”とは、退治すべき悪であり、懐柔し利用すべきまたは宝を手に入れるために騙す対象であり、或いは他に手だてがないために仕方なく一時的に受け入れたとしても、いつかは滅ぼすべき敵であった。

“鬼”の話が絵本となると、子どもは具体的に“鬼”をイメージするようになる。その“鬼”の姿は、一本または二本の角を頭に生やし、見上げるような大きな体は赤や青や黒の色をしていて毛深く、衣服は虎などの獣の皮を腰にまとっているというもので子どもをいっそう恐怖させるものであった。絵本の他にも、村の地藏堂の天井に描かれた地獄絵の中にも、“鬼”を見ることはでき、子どもは日常的にその姿を見て十分にイメージすることが出来た。子どもは、昔話を楽しむ中で“鬼”へのこうした共通概念をもしっかりと受け止め自己の中に形作っていったと考えられる。

韓国にも日本の“鬼”に似た“トッケビ”という存在がある。昔話に多く登場し、韓国の子どもにも馴染み深い存在である。韓国の絵本で“トッケビ”を見ると、まさしく日本の“鬼”の姿をしている。しかし、韓国の“トッケビ”は、日本の“鬼”に比べて、その扱われ方が少し異なっている。韓国の“トッケビ”も日本の“鬼”と同じように悪さをして人間に迷惑を掛けるのであるが、日本の“鬼”が完全否定されるのに対し、韓国の“トッケビ”には人間からの受容が見ら

れるのである。この認識は、その絵本を読む韓国の子ども達にも当然受け継がれているはずである。

中国の“鬼（ガイ）”は靈魂とされていて人々に忌み嫌われており、その“鬼”は韓国を経て日本に伝わった¹⁾。そして、韓国と日本の“トッケビ”と“鬼”は、同じような形をしている。そうした共通点を持つ両者が、日本では“鬼”への子ども達の完全拒否の認識と、韓国では“トッケビ”への子ども達の受容の認識という大きな違いは、どこからきたものであろうか。本研究では、そうした点について明らかにしたいと考えた。

2. 日本の昔話に見る“鬼”

日本で“鬼”が出てくるもっとも古い話は日本書紀²⁾と言われ、元々は中国の“鬼（ガイ）”と同様に靈魂とされていた。靈魂である“鬼”は、もともと視覚的に固定した像をもっていなかったのであるが、佐々木³⁾は「日本の「鬼」は時代と共に後の意味範囲を拡大させてきた。」としている。もともと、日本の“鬼”は「隠れる」という意味の「隠（オン）」が変化したモノといわれる。日本での“鬼”が初めてその姿を見せたのは、「百鬼夜行絵巻」（室町時代：東京国立博物館蔵）といわれ、その姿は現代に伝わる“鬼”の姿と良く似ている。他の妖怪らしきものと一緒に描かれたこの“鬼”は、図1に見られるように着物らしきものを肩に羽織っただけのほとんど裸の体に禪を締め、とがった耳の後ろに2本の角を生やし、手足は牛のように二つに割れている。こうした“鬼”の話はその姿と共に、日本のあちこちに語り継がれている。

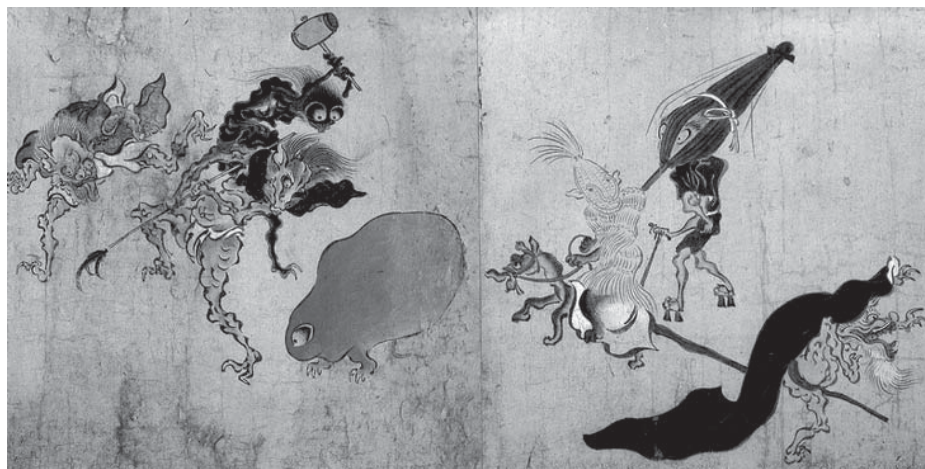


図1 「百鬼夜行絵巻」

2004～2005年にかけて、全国の小学校教育研究会や学校図書館協会などによって「よみがたり・〇〇の昔話」として、各都道府県別にそれぞれ一冊の本にまとめられた。この本には、その地方でも最も広く伝承されているとして選ばれた昔話が載せられている。その中には、“鬼”の話も多く収録されている。多くの地域でこの本に取り上げられている昔話として、「地獄巡り」（宮城、奈良、徳島、長崎、熊本）、「桃太郎」（栃木、富山、岡山、香川）、「三枚のお札」（青森、宮城、山形）、「喰わず女房」（長野、鳥取、愛媛）、「一寸法師」（京都、大阪）などがある。題名は地域により様々で、例えば「地獄巡り」という話も宮城県と奈良県ではそのままの題名であるが、その他では「地獄もどしの三人」（徳島）、「鬼に飲まれたでえどんたち」（長崎）、「医者どんと山法師と軽業師」（熊本）となっているが、どれも話の内容は同じである。また、「三枚のお札」も、

これが一般的題名であるが、地域によっては「たんこと鬼婆」(青森)、「小僧と鬼婆」(宮城)、「三枚のお札と鬼婆」(山形)となっている。なお、一般的な話の「三枚のお札」では小僧を食べようとするのは“山姥”とされているが、これらの話の中では“鬼婆”となっている。“鬼”の出てくる話として、次のものがよく知られている。

【鬼の登場する昔話】

- ・「地獄巡り」(内容：鍛冶屋と医者と山伏が地獄見物に出かけ、それぞれの特技を生かして地獄の鬼達を懲らしめ、とうとう“鬼”に帰ってくれと言わせる愉快的な話。)
- ・「桃太郎」(内容：桃から産まれた桃太郎は、成長すると人々に悪さを働く鬼ヶ島の鬼退治に出かける。桃太郎は、途中で出会った犬、猿、雉にきび団子を与えて家来にする。“鬼”を退治した桃太郎は“鬼”の宝物を持って村に帰り、おじいさんとおばあさんと幸せに暮らす。)
- ・「三枚のお札」(内容：山に栗拾いに行く小僧に、和尚さんは三枚のお札を渡す。暗くなり鬼婆の家に泊まった小僧は、鬼婆に食べられそうになるが、三枚のお札の不思議な力に助けられて逃げ帰る。)
- ・「喰わず女房」(内容：あるところに、米が惜しくて女房をもらわない男がいた。そこへ、ご飯は喰わないという女房が現れ結婚するが、米がよく減る。男がそっと見ると、女房が頭の中の口でご飯を大量に食べている。男が離婚を切り出すと、女房は鬼婆になって男をさらい、子どもに食べさせようとする。男は、鬼婆の苦手なヨモギや菖蒲の中を逃げて。)
- ・「一寸法師」(内容：小さく産まれて一寸法師と呼ばれる男が、川を下って都に行く。都の姫をさらう“鬼”を針の刀で退治し、“鬼”の宝の「打ち出の小槌」を奪う。打ち出の小槌で大きく変身した一寸法師は姫と結婚し、村からおじいさんとおばあさんも呼び寄せて幸せに暮らす。)

以上のような全国的に有名な話のほかにも、各地域で特有の場所や岩や山、また風習などのいわれに“鬼”が登場するものもある。

【鬼の登場する地域限定の昔話】

- ・岩手県「鬼岩」(内容：御箱崎半島の北から“鬼”がホタテを取りに来る。岩投げの力比べに負けて鬼は山に逃げる。)
- ・群馬県「鬼と長いも」(内容：白根山と四阿山に住む鬼は悪さばかりしていた。5月の節句に、村男が妻に長芋を摺ってとろろ汁を作るよう言いつける。“鬼”はそれを見て、自分の角を折り摺り下ろそうとするが、固くて出来ない。おいしそうにとろろ汁を食べる夫婦を見て、“鬼”は自分を食べられては大変と山から居なくなった。それから長芋は鬼払いといって、度々作られるようになった。)
- ・岡山県「鬼の手形岩」(内容：遥照山の“鬼”が、岩を投げて遊んでいて岩が道の真ん中に落ちた。村人が困っているのを聞いて“鬼”は元に戻そうと何度も投げてやっと戻したが、その岩には“鬼”の手の形がついていた。)

先にあげた日本全国の各「読みがたり」では、“鬼”の表し方に、幾つかのパターンがあり、大きくは、次の三つに分けられる。

① “鬼”は人間にとって悪き存在であり、徹底的に排除（退治する、追い払うなど）すべきである。

② “鬼”の不思議な力や強い力を利用する。（山や橋を作らせるなど）

③ “鬼”は頭が悪いので、騙されやすい。（騙す、約束を破るなどしても構わない）

“鬼”は、怖いという半面、堂々と“いじめ”をしてよいと認定されていたことが推察される。「村八分」以上の「村十分」ともいえる存在であった。「鬼の石運び」（福岡）の『大明神に命じられた者が、高根山の“鬼”に一晩で石が運べたらそのまま住み続けてよいという。しかし、“鬼”が約束を果たさそうになると、夜明け前に鶏の鳴き真似をして高根山から追い払う』という話の内容からも、“鬼”は騙してもよいし、“鬼”との約束を守らなくても構わないとされていることがわかる。また、人間にはどうしようもない自然の力を、“鬼”の仕業としてきたこともあった。そうした“鬼”のお話を、大人は何故子どもに聞かせる必要があったのか。その大きな理由として、人間にとって“鬼”とは受け入れがたい異質な存在であり、対立する関係であったことがあげられる。昔の村社会で生きていく上で、人々は決して“鬼”側に立つことはしてはならないことであった。大人にとって、子どもが“鬼”に同情したり、ましてや交流を持とうとしたりすることは、村落において自分の家族の生活が成り立たなくなることであり、“鬼”への接近は有り得ないことであった。子どもに、躰として、教訓として、“鬼”への対応の教育を昔話の中で繰り返し伝えてきたと考えられる。“鬼”は交流することはもちろん、近づくこともままならない、全き悪の象徴として子どもに語り継がれてきたのである。

しかし、現代の日本の子どもにとって「桃太郎」や「一寸法師」は、以前ほどに誰もが持っているような代表的な絵本とは言えなくなっている。かつては多くの子どもが口ずさんでいた「桃太郎」や「一寸法師」の童謡も、現在では日常的には歌われなくなっている。今では、もう“鬼”を完全なる悪の存在として、子どもに教え込まなければならない時代とは言えなくなっている。“鬼”は「桃太郎」や「一寸法師」においては、悪いことをすると罰せられるというたとえ話であり、「地獄巡り（地獄のそうべえ）」などは、“鬼”と人間のコミカルなお話として今は語り継がれている。「泣いた赤鬼」など、“鬼”に心をよせた創作童話も表れた。また、「節分」「なまはげ」などの行事の中においては、心の中の悪い鬼（弱虫鬼、泣き虫鬼など）を追い出そうという形で、“鬼”は現代社会の中に認識されるようになってきている。



図2 絵本「一寸法師」（日本）の鬼



図3 絵本「トッケビのこんぼう」（韓国）のトッケビ

3. 韓国の昔話に見る“トッケビ”

韓国の“トッケビ”は日本の“鬼”とは、姿形がそっくり同じである。“鬼”は、不思議な力を持っているが、頭が悪く騙されやすいという設定も似ている。金⁴⁾は、「韓国の“トッケビ”は、一筋縄では説明の付かない多種多様な性質を持っているが、大筋では人間に富をもたらしたり、害を与えたりする両面性をもった超自然的な存在として理解されている。“トッケビ”についての伝承は、南から北まで韓国各地に広く分布している。また、民間伝承の世界に頻繁に登場するだけでなく、地域によっては民間信仰の対象にもなっている。」と述べており、部分的には日本の“鬼”との共通点は多い。そして、“トッケビ”と“鬼”の姿形の相似性について金⁴⁾は「近代以前の韓国では、“トッケビ”を表現する一定したイメージが定着していなかったといえる。」と述べた上で「韓国の“トッケビ”のイメージが、日本の“鬼”のイメージをもって描かれるようになった決定的な契機は、日本の植民地時代の「国語読本」(日本語)による。」と断定し、具体例として「瘤取り爺」の挿絵をあげて「つまり、日本の「小学読本」に登場する“鬼”のイメージを参考にして創り出された“トッケビ”のイメージが「朝鮮語読本」に収録され、「国語読本」(日本語)には、日本の“鬼”の図像が収録されることによって、もともと相通じるイメージで描かれていた両方の図像が重なるようになり、両者の区別がまったくつかなくなったのである。」と説明している。

図4は、「小学国語読本(日本)」(1933)『瘤取り爺』の挿絵である。日本では、なじみの深い“鬼”の姿が描かれている。図5は、「普通学校朝鮮語読本(韓国)」(1923)「瘤を取られた話」の“トッケビ”の挿絵である。韓国では、1915年より日本による統治が始まっており、この“トッケビ”の挿絵も日本の影響を受けてはいるが、まだ般若のような顔に筋骨たくましい人間として描かれてる。ところが、図6の韓国での日本語教育の教科書「初等国語読本(韓国)」(1939)の「コブトリ」の挿絵は、図4の日本の教科書の挿絵と全く同じ挿絵が使用されている。

ここから、“トッケビ”は“鬼”と全く同じ姿を持つようになったのである。

しかし、姿かたちは“鬼”と同じになっても、韓国の昔話に語られる“トッケビ”は、いたずらが好きで悪さもするが、どこか憎めない存在として登場している。宝物を持っていて、乱暴者



図4 「小学国語読本(日本)」(1933)
『瘤取り爺』の挿絵

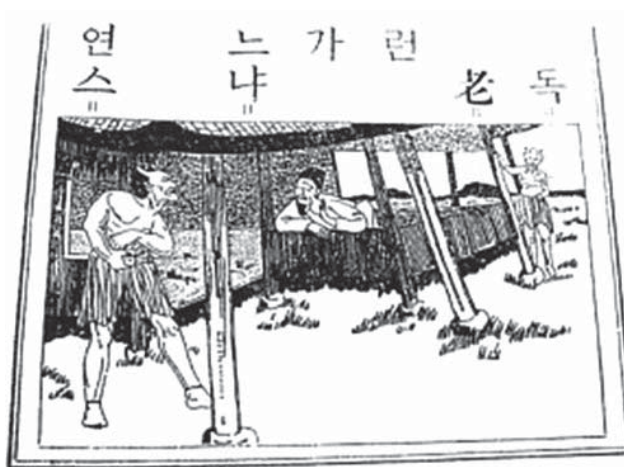


図5 「普通学校朝鮮語読本(韓国)」(1923)
「瘤を取られた話」のトッケビの挿絵

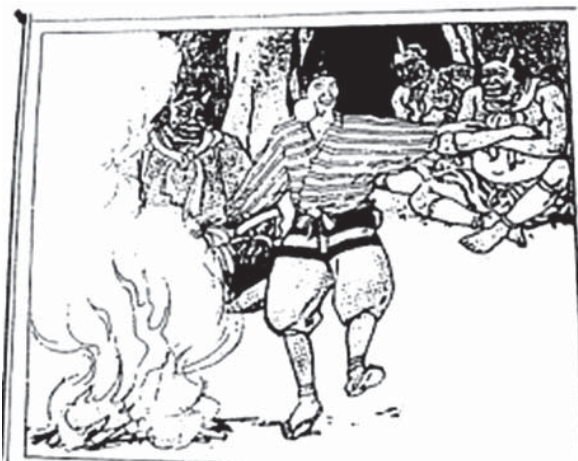


図6 「初等国語読本（韓国）」(1939)の「コブトリ」の挿絵

であるという点は“鬼”と同様であるが、簡単に騙されたり、忘れてしまったりするお調子者であったり、受けた恩義は忘れずにきちんと返すとされる“トッケビ”は、日本のあくまで排除の対象となる“鬼”とは明らかに受け止め方は異なっている。

【トッケビの登場する昔話】

- 「トッケビのこんぼう」(内容：正直な若者がハシバミを拾っていると、日が暮れて山奥の小屋に泊った。夜中に“トッケビ”が集まり、こん棒を使って金貨や銀貨を出した。若者がハシバミをかじると、ものすごい音がして“トッケビ”は逃げ出した。若者はこん棒を持ち帰り、金持ちになった。欲張り者がその話を聞いて同じようにするが、ハシバミは「シー」という音を出し、鬼に気付かれて欲張り者は鬼にひどい目にあわされた。)
- 「乞食の兄弟とトッケビ」(内容：兄に盲目にされて追い出された弟は、山の空き家の屋根裏で“トッケビ”達の不思議な話を聞く。話の通りにすると、自分の眼は見えるようになり、長者の娘の病気も治して婿となり、幸せになった)
- 「忘れん坊のトッケビ」(内容：若者が歩いていると、“トッケビ”が来た。“トッケビ”は、角はなく人間の姿をしているが、必ず名前を二回呼んで二回手を叩くので判る。“トッケビ”にお金を三文貸すと、翌日から毎日三文を返しに来る。鍋があるとよいと話すと、鍋も加えて毎日返す。着物も洗濯棒もくれる。ある日、“トッケビ”は無駄使いをしたと天の神様に呼ばれ、それからは現れなくなった。)
- 「トッケビがくれた宝物」(内容：頼りない若者が、修行の旅で女“トッケビ”に出会う。若者は女“トッケビ”と一年一緒に暮らし、開けば米の出る風呂敷をもらうが、帰りの宿の主人に取られる。また、同じように若者は女“トッケビ”と一年暮らして、尻を叩くと小判の出る馬をもらうが、宿の主人にまた取られる。最後は尻を叩く金棒も取られるが、宿の主人の尻を金棒は叩き続け、若者は宝物を帰してもらう。しかし、宝物もボロボロになって、若者は元の黙阿弥となったという。)

これらの話の中の“トッケビ”は、「忘れん坊」で「少し考えが足りなくて」「悪さやいたずらが好き」である。こうした“トッケビ”の性質は、何と子どもの特質と共通していることである

うか。

「忘れん坊のトッケビ」などは、なんともとぼけた愛嬌のある者として登場させている。“トッケビ”の中に子どもの未熟な点を見せて、「いけないよね」「気をつけようね」と、諭しているという見方も出来る。また、“トッケビ”は、恩恵を忘れない倫理性も見せている。韓国では、特に孝行や信義、礼儀を重んじることから、どの話においても親孝行な者や真面目で知恵のある者は、“トッケビ”の不思議な宝物を手に入れて幸せになっているが、親不孝な者や愚かな者、欲張りな者には、幸福はやってこないという教訓が入っている。“トッケビ”は、良きも悪きも含めた現実のあり方の象徴として子どもに語られてきたのではないかと考えられる。日本の“鬼”との大きな違いは、“トッケビ”は徹底的に排除すべき対象とはなっていないことである。

4. 子どもへの期待と象徴としての“トッケビ”と“鬼”

大人が子どもに昔話を聞かせてきた背景には、話を通して子どもへの期待がある。昔の日本では、村社会の掟(“鬼”を受け入れてはならない)を破ることは、そのまま自らが村社会から排除されることであり、自らが“鬼”の側に移行することであったと考えられる。人間として生きられず、“鬼”としてしか生きざるを得ない状況に陥らないことを、昔話を通して子どもに期待したことが伺われる。

しかし、現代ではそうした意識は薄れて、「桃太郎」や「一寸法師」といった“鬼”を成敗する話は、子どもにはあまり話されなくなった。代わりに「泣いた赤鬼」「海にしずんだ鬼」など、“鬼”の気持ちに寄り添った内容の話が読まれるようになった。日本の幼稚園と保育所の保護者への調査⁵⁾で「お子様には、将来どのような人になって欲しいと思いますか。」との質問に、1位「まわりの人に思いやりがある、心やさしい人」2位「からだも心も健康な人」3位「善悪をわきまえ、他人に迷惑を掛けない人」の答えであった。現在も、昔話や場所の言い伝えや伝統行事の中に鬼は存在しているが、子どもへの伝え方は『自分の心の中の“鬼”を追い出そう』であり『自分とは違う相手の立場を思いやろう』というように、変化してきている。

韓国においては、子どもへの期待に関する調査⁶⁾では、1位「礼儀正しさ」2位「責任感」3位「規則を守り、人に迷惑を掛けない公共心」とある。韓国で今も昔話の“トッケビ”が愛されるのは、崔⁷⁾の「日本の“鬼”は、角があって肌が赤色や青色で、怖く、人に直接的な被害を与えるが、韓国の“トッケビ”はいたずら好きで、悪人をからかい、善人には魔法の杖のよう棒を持って、富と天の恵みで報いてくれると言われており、親しさも感じられる。人間と一緒に遊びたがり親しく過ごそうとする。また、怒りっぽく、体面を重視し、猜疑と嫉妬も多く、ちょっと愚かなところもある。酒、話、歌、相撲などが好きで、赤い色を嫌う。“トッケビ”はバカ正直なところがある。」という“鬼”と異なる“トッケビ”の性質が、受け入れやすくさせていると思われる。

昔話については、様々にその素晴らしさが言われている。しかし、現在の子どものにとって“鬼”や“トッケビ”の存在の意味づけは、不思議な力と非日常的な容姿で子どもの夢をふくらませ、スリル感を刺激し、未来を力強く生きる力の育成にあると言えよう。

5. おわりに

“鬼”の昔話では、小さな子どもや女性、または老人（おじいさんやおばあさん）が、勇気を出して知恵や機転で“鬼”をこらしめる話が多く見られる。子どもは、自分が小さく、力のないことをよく知っている。しかし、子どもは自分と同様に小さい、あるいは自分よりもはるかに小さい主人公（一寸法師など）が、大人も恐れる“鬼”を小気味よく退治する話に、わくわくして聞き入る。そして、わくわくして聞き入る中で、自分自身の心のあり方を次第に変容させていく。子どもは、主人公に自分自身を重ね、自分の中のまだ見ぬ力の存在を予感して「希望」と「自信」をもつようになっていく。人は誰しも、日常的に自分の行く手を阻む「困難」や「力不足」「運命」「諦め」「弱気」といったものを持っていると考える。“鬼”の登場する話には、諦めずに努力し工夫すれば、それらに必ず打ち勝てるのだという励ましのメッセージが随所に込められている。そのメッセージは、子どもを楽しませながら、繰り返し日常的に伝えられてきた。

子どもは、“鬼”の話を聞きながら、日々自分の心に住む様々な“鬼”を主人公と共に退治するシミュレーションを繰り返しているとも言える。こうした点を踏まえ、現代では大人が子どもの育ちに対して願う内容の変化から、“鬼”の意味するもの、象徴するものも変化してきたといえる。現在では、子どもに聞かせる昔話の“鬼”は、実在する「〈人〉にあらざるもの」¹⁾ではなく、人に内在する克服すべきもの、と認識されていると言えよう。

【注・引用文献】

- 1) 武田雅哉：「〈鬼子〉達の肖像」中央公論新社、2005 27頁
「〈鬼〉—〈人〉にあらざるもの」
「〈鬼〉とは死後の靈魂、さらには祖先のことなどを意味する語であるが、同時にまた、怪物じみた存在をも指して用いる場合がある。そしてまた、遙か遠方の地域や、そこに住う民族を、「鬼方」「鬼域」「鬼国」などと呼ぶこともあった。」
- 2) 「日本書記」斉明天皇七年（六六一）条の部分
「秋七月の甲午の朔に、天皇、朝倉宮に崩りましぬ。八月の甲子の朔に、皇太子、天皇の喪を奉徙りて、還りて磐瀬宮に至る。是の夕に、朝倉宮の上に、鬼有りて、大笠を着て、喪の儀を臨み視る。衆皆嗟怪ぶ。」
- 3) 佐々木翔太郎：「日本と中国における「鬼」のイメージの差異について」—マインドマップ調査の分析—『山口大学文学会誌』2010 61-62頁
- 4) 金容儀：「玄界灘を渡った鬼のイメージ」—なぜ韓国のトッケビは日本の鬼のイメージで語られるのか—国際日本文化研究センター 1頁, 15頁, 19～21頁
- 5) ベネッセコーポレーション：「第2回子育て生活基本調査」（幼児版）—4子どもへの期待と習い事—2003
- 6) 金仙美：「日本と韓国のしつけ文化」東北大学大学院教育学研究科研究年報 第54集 第1号 2005 110頁
- 7) 崔吉城：「韓国のトッケビ」東洋経済日報（随筆）2010（10月15日）

【参考文献】

- 1) 北海道むかし話研究会・北海道学校図書館協会：読みがたり「北海道のむかし話」2005
- 2) 青森県小学校国語研究会：読みがたり「青森のむかし話」2005
- 3) 岩手県小学校国語教育研究会：読みがたり「岩手のむかし話」2004
- 4) 「宮城の昔話」刊行委員会：読みがたり「宮城のむかし話」2005

- 5) 秋田県国語教育研究会・県学校図書館協会：読みがたり「秋田のむかし話」2004
- 6) とんと昔の会・山形県国語教育研究会：読みがたり「山形のむかし話」2005
- 7) 福島県国語教育研究会：読みがたり「福島のむかし話」2004
- 8) 茨城民族学会：読みがたり「茨城のむかし話」2004
- 9) 下野民族研究会：読みがたり「栃木のむかし話」2004
- 10) 群馬のむかし話研究会：読みがたり「群馬のむかし話」2005
- 11) 埼玉県国語教育研究会：読みがたり「埼玉のむかし話」2005
- 12) 「千葉のむかし話」編集委員会：読みがたり「千葉のむかし話」2005
- 13) 東京むかし話の会：読みがたり「東京のむかし話」2004
- 14) 相模民族学会：読みがたり「神奈川のむかし話」2004
- 15) 新潟県小学校図書館協議会：読みがたり「新潟のむかし話」2005
- 16) 富山県児童文学研究会：読みがたり「富山のむかし話」2005
- 17) 石川県児童文化研究会：読みがたり「石川のむかし話」2005
- 18) 福井県民話研究会：読みがたり「福井のむかし話」2005
- 19) 山梨県国語教育研究会：読みがたり「山梨のむかし話」2004
- 20) 長野県国語教育学会：読みがたり「長野のむかし話」2005
- 21) 岐阜県児童文学研究会：読みがたり「岐阜のむかし話」2004
- 22) 昔話研究会：読みがたり「静岡のむかし話」2004
- 23) 愛知昔話の会：読みがたり「愛知のむかし話」2006
- 24) 三重県小学校国語教育研究会：読みがたり「三重のむかし話」2004
- 25) 滋賀県小学校教育研究会国語部会：読みがたり「滋賀のむかし話」2004
- 26) 京都の昔話研究会：読みがたり「京都のむかし話」2005
- 27) 大阪府小学校国語科教育研究会・「大阪の昔話」編集委員会：読みがたり「大阪のむかし話」2005
- 28) 兵庫県小学校国語教育連盟：読みがたり「兵庫のむかし話」2004
- 29) 奈良の昔話研究会：読みがたり「奈良のむかし話」2004
- 30) 和歌山県小学校教育研究会国語部会：読みがたり「和歌山のむかし話」2004
- 31) 鳥取県小学校国語教育研究会：読みがたり「鳥取のむかし話」2005
- 32) 島根県国語教育研究会：読みがたり「島根のむかし話」2005
- 33) 岡山県小学校国語教育研究会：読みがたり「岡山のむかし話」2004
- 34) 広島県学校図書館協議会：読みがたり「広島のむかし話」2004
- 35) 山口県小学校教育研究会国語部：読みがたり「山口のむかし話」2004
- 36) 「徳島のむかし話」編集委員会：読みがたり「徳島のむかし話」2006
- 37) 香川県国語教育研究会：読みがたり「香川のむかし話」2005
- 38) 愛媛県教育研究協議会国語委員会：読みがたり「愛媛のむかし話」2004
- 39) 土佐教育研究会：読みがたり「高知のむかし話」2005
- 40) 福岡県民話研究会：読みがたり「福岡のむかし話」2005
- 41) 佐賀県小学校教育研究会国語部会：読みがたり「佐賀のむかし話」2005
- 42) 長崎県小学校教育研究会国語部：読みがたり「長崎のむかし話」2005
- 43) 熊本県小学校教育研究会国語部会：読みがたり「熊本のむかし話」2004
- 44) 大分県小学校国語教育研究会：読みがたり「大分のむかし話」2004
- 45) 宮崎県民話研究会：読みがたり「宮崎のむかし話」2005
- 46) 鹿児島島のむかし話研究会・鹿児島県小学校教育研究会国語部会：読みがたり「鹿児島のむかし話」2005
- 47) 沖縄昔の会：読みがたり「沖縄のむかし話」2005
- 48) 民話：「一寸法師」（ポプラ社）2002

象徴としての“鬼”と“トッケビ”

- 49) 浜田広介：「泣いた赤鬼」偕成社 1992
- 50) チョン・チャジュン再話：「トッケビのこんぼう」（平凡社）2003
- 51) 徐正五：「韓国昔ばなし」（白水社）2006